

平成24年度「特別支援教育総合推進事業（特別支援学校と小・中学校との交流及び共同学習の推進）」報告書

団体名	宮城県教育庁特別支援教育室
研究開始年度	平成23年度

I 概要

1 指定校の一覧

特別支援学校		交流及び共同学習の相手先となる小・中学校	
設置者	学校名（ふりがなを付すこと）	設置者	学校名（ふりがなを付すこと）
宮城県	みやぎけんりつやまもとしえんがっこう 宮城県立 山元 支援学校	亶理町	わたりちょうりつわたりしょうがっこう 亶理町立 亶理小学校
			わたりちょうりつおおくましようがっこう 亶理町立 逢隈小学校
			わたりちょうりつあらはましようがっこう 亶理町立 荒浜小学校 (亶理町立逢隈小に間借り中)
			わたりちょうりつよしだちゅうがっこう 亶理町立 吉田中学校
		山元町	やまもとちょうりつやましたしょうがっこう 山元町立 山下小学校
			やまもとちょうりつやましただいいちしょうがっこう 山元町立 山下第一小学校
			やまもとちょうりつやましただいにしょうがっこう 山元町立 山下第二小学校 (山元町立山下小に間借り中)
			やまもとちょうりつなかはましようがっこう 山元町立 中浜小学校 (山元町立坂元小に間借り中)
			やまもとちょうりつやましたちゅうがっこう 山元町立 山下中学校

2 研究テーマ

「地域・学校間のネットワークを生かした交流及び共同学習の在り方」 －居住地校学習の実践を通して－

3 研究の概要

<p>(研究内容)</p> <p>山元支援学校と各小・中学校間で連携を図り、居住地校学習の実践の充実と小・中学校教員への理解啓発を図る取組を行った。</p> <p>(1) 居住地校学習を支援する地域連携ネットワークの構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ○居住地校学習研究運営協議会を開催（年3回実施）し、居住地校学習の改善策や新しい取組に対して助言を受け、実践につなげる。 ○運営協議委員と各小・中学校の特別支援教育コーディネーターで構成された居住地校
--

学習研究ワーキング部会を開催（年3回実施）し、研究の推進を行う。

- 郡内の小・中学校や高等学校の特別支援教育コーディネーター，幼稚園・保育所等の担当者，町教育委員会・保健福祉課担当者，福祉施設職員で構成された既存の亘理・山元地区特別支援教育連絡会（年3回実施）と連携を図り，居住地校学習の情報提供・交換の場とする。
- 年度初めに，交流及び共同学習に関する研修会と居住地校学習年間計画の検討会（以下拡大ワーキング部会）を開催する。

（2）居住地校学習の充実

- 今年度の居住地校学習実施回数
 - 小学校 38回（対象児童9人，受入校7校）
 - 中学校 14回（対象生徒4人，受入校2校）
- 実施に向けた準備の在り方の見直しを行う。
- 居住地校学習実施計画書の様式を作成する。
- モデル校を設置し，授業の検討及び指導案を作成する。
- 運営協議委員とワーキング部員による，モデル校での居住地校学習の授業参観を実施（年2回実施）する。
- 居住地校学習ボードを作成し，間接交流（注1）の充実を図る。
 - ※（注1）小・中学校と山元支援学校の学校・学級だよりの交換や作品・手紙のやりとり等の間接的な活動
- 居住地校学習年間活動終了後の教員及び児童生徒へのアンケート調査・集計をもとに居住地校学習の成果と課題を明らかにする。

（3）理解啓発

- 年度初めに拡大ワーキング部会で「交流および共同学習」の研修会を行う。
- 亘理・山元地区特別支援教育連絡会で居住地校学習の実践事例を紹介する。
- 児童・生徒向け居住地校学習ボードを各学校へ配付する。
- 山元支援学校教員が居住地校学習受入校での授業を行う。
- お便りや研修会で居住地校学習の取組の紹介をする。

（評価の観点及び評価方法）

（1）居住地校学習を支援する地域連携ネットワークの構築

【評価の観点】

- 研究運営協議会で指導助言を受け，居住地校学習の推進を円滑に行うことができたか。
- ワーキング部会において，居住地校学習の推進に向けた協議が円滑に行われたか。
- 亘理・山元地区特別支援教育連絡会と連携を図り，情報提供・交換ができたか。
- 拡大ワーキング部会を通して，居住地校学習の実施に向けた話し合いが円滑に行われたか。

【評価方法】

- 研究運営協議会において、研究の方法や居住地校学習の推進について評価を行う。
- 教員へのアンケートを実施し評価を行う。

(2) 居住地校学習の充実

【評価の観点】

- 相互理解が図ることができる居住地校学習実施計画書の様式を作成することができたか。
- 居住地校学習後の児童生徒及び担任へのアンケートによる評価を集約し、その後の授業に生かすことができたか。
- モデル校での綿密な打合せや授業の検討及び指導案の作成を行うことができたか。
- 授業参観・事後検討を通して、よりよい授業の在り方を検討することができたか。

【評価方法】

- 授業後の担任間のアンケートのやり取りで授業の成果や課題を明らかにする。
- 居住地校学習実施後の教員や児童生徒、保護者からのアンケートを実施し、評価を行う。

(3) 理解啓発

【評価の観点】

- 年度初めの拡大ワーキング部会での「交流および共同学習」の研修会を通して、担任による相互理解を図ることができたか。
- 居住地校学習ボードの設置を通して、受け入れ校の居住地校学習について、興味関心を高めることができたか。
- 互理・山元地区特別支援教育連絡会での居住地校学習の実践事例の紹介を通して、地域への理解啓発を図ることができたか。
- 山元支援学校教員による居住地校学習受入校での授業を通して受入学級児童の理解啓発を図ることができたか。

【評価方法】

- 研修会での参加者へのアンケートを実施し評価を行う。
- 居住地校学習実施後の教員や児童生徒からのアンケートを実施し評価を行う。

4 研究成果の概要

<成果>

(1) 支援体制の構築

- 研究運営協議会では、協議委員より意見や助言をいただきながら本研究の方向性を導き出し、研究の計画・運営を進めることができた。
- ワーキング部会では、各受入校における課題から今後の方向性を導き出し研究計画に沿って授業づくりや理解啓発のための協議を進めることができた。
- 互理・山元地区特別支援教育連絡会と連携をし、交流及び共同学習についての研修会や居住地校学習の事例報告など研修の場を設けることができた。更には、障害児・者

が地域で暮らすため現在の状況と課題について検討することができた。

○拡大ワーキング部会では、平成23年度の居住地校学習の様子を紹介や、居住地校学習を進めるに当たっての留意点等の説明をした。その後、受入校ごとに分かれて本校担任、地域支援部員と受入校コーディネーター、受入学級担任で本校児童生徒の実態や支援の共通理解を図り、今後の居住地校学習の日程や実施内容の検討を行うことができた。

○受入校では、ワーキング部員でもある特別支援教育コーディネーターが連絡・調整役となり、スムーズな居住地校学習に取り組むことができた。

(2) 居住地校学習の充実

○受入校との年間活動計画打合せ前に、受入校の年間計画、各教科の年間指導計画を準備した。それをもとに本校担任が児童生徒の実態に応じて可能な教科単元や時期を考慮して打合せに臨んだため、スムーズに計画を立て、居住地校学習に取り組むことができた。

○担任間での打合せの後に統一した実施計画書を作成することで、ねらいや配慮事項を明確して支援にあたることができた。また、実施計画書を保護者へ配付することで連絡だけでなく居住地校学習での活動の理解につなげることができた。

○モデル校において、特別支援学校、小学校相互の児童のねらいに迫るための支援を学習展開に沿って丁寧に行ったことにより、それぞれのねらいを達成することができ、児童の自主的で見通しを持った学習や活動の様子がたくさん見られた。

○ワーキング部員による居住地校学習の授業参観を計画し、授業づくりのための検討会を開催することができた。

○居住地校学習ボードの活用や児童生徒間の手紙のやりとりなどを通して、学習当日だけでなく、継続してお互いを意識することができた。

○児童生徒への居住地校学習実施後のアンケートでは、児童生徒が交流の楽しさを感じ取っていることや児童生徒なりに本校児童生徒に対しての思いをもって取り組んでいることが分かった。また、担任間でのアンケートをFAXでやりとりすることで授業の成果や反省を実施後すぐに担任間で共有をすることができ、次の活動への改善点として活用することができた。

(3) 理解啓発

○研修会を通して、居住地校学習に携わる教員だけでなく、特別支援教育に携わる関係者の方々にも交流及び共同学習の推進を図ることができた。

○居住地校学習のねらいや山元支援学校児童生徒自己紹介カード、年間計画を掲示した居住地校学習ボードが、受入校児童生徒への興味関心を持たせる一つの手段となった。

○山元支援学校教員による障害理解の授業は、山元支援学校の様子や交流児童の学校での様子を知るとともに交流をする前に受入学級児童への意欲付けとなり、理解啓発としてはとても有効であった。

○保護者からのアンケートで、来年度は具体的な教科名やこれまで以上にいろいろなことを経験させたいという意見が多く出された。これまでの取組の成果を保護者の方に

理解して頂いたとともに、居住地校学習への更なる期待を寄せて頂いていると考えられる。

○子供会やお祭りなどの地域の行事への参加や登校の際に手を振るなど、地域での関わりを持つ機会が増えてきている。

<課題>

(1) 支援体制の構築

○亘理・山元地区特別支援教育連絡会との連携を図りながら、来年度以降もできる限り居住地校学習を推進していくための体制づくりを継続していく。

(2) 居住地校学習の充実

○打合せの際の本校児童生徒の共通理解が不十分で、居住地校学習実施で児童生徒への関わりに戸惑いを感じる受入校教員がいた。児童生徒の実態把握において、有効な支援の方法やかかわり方の共通理解や映像などを使った普段の本校児童生徒の様子を見せるなど、打合せの持ち方の検討が必要である。

○居住地校学習担当者が一堂に会したワーキング部会は大変有効であったという意見がある反面、受入校では年度初めの忙しい時期でなかなか参加できないという意見もある。来年度以降も実施する方向で検討しているが、各校の日程などを確認しながら出来る限り多くの参加を呼びかけ有意義な研修としていきたい。

(3) 理解啓発

○居住地校学習ボードは理解啓発に有効という意見があるが、一方で設置場所の検討やお便りなどの継続的な更新が課題として挙げられた。各校の状況に応じて活用し、設置場所や間接交流での活用の仕方を検討していく必要がある。

○今後は受入学級だけでなく、受入校の児童生徒や保護者・教職員、更には地域の方々への理解啓発の場を設けていく必要がある。